

ベルギーでの研究生活

関西大学社会学部心理学専攻 助教

守谷 順 (もりや じゅん)

正直に言えば、今の時代、研究のために海外に行く必要はないと思っていました。インターネットが通じれば、世界のどこでも最新の研究を読むことができ、英語論文で自分の研究を世界に発信することも可能です。ならば、なぜ海外。私の場合、理由はいろいろでしたが、結局は面白そうという単純な気持ちと成り行きで海外に行くことに決めました。

私も恐らく多くの日本の心理学研究者と同様、英語は読める、やや書ける、あまり話せない程度の英語力でした。海外で生活するには心許ない英語力です。なので、力むのはやめました。「英語力をあげるだけでもいい、ちょっと海外の雰囲気を味わって、もし自分にあわなかったら半年で帰ってこよう」と。結局は2年間、海外の研究室にお世話になったわけですが。

2011年4月より、ベルギー・ゲント大学の通称 PANLAB で、客員研究員として研究させていただきました。ベルギーという国は長い歴史の中で幾度となく言語闘争が繰り返り広げられており、現在は西のフランドル地方ではオランダ語が、東のワロン地方ではフランス語が公用語となっています。ゲントはフランドル地方に属するのでオランダ語が使用されていますが、多くの人が英語を話せた印象を受けます。

研究室の学生の国籍は多種多様で、ベルギー人は半数程度、あとはオランダ、ドイツ、イタリア、スウェーデン、ルーマニア、トルコなど。誰も英語を母国語としないため、英語は易しかったと思い

ますし、なかには「私、英語苦手だから」と、とても共感のわく発言をする人もいました（私からしたらその人も十分英語を話せているのですが）。そんな環境でしたので、英語がうまく話せなくてもみんな優しく受け入れてくれましたし、その優しさに甘えながら日本人のいない環境でもくもくと研究に励むことができました。

研究は、照準を世界にあわせているだけあり、ハイレベルだったと思いますし、皆アグレッシブでした。それはゼミの議論でも感じられますし、常に走っている研究の数からも実感できました。心理実験でネックとなる参加者集めも、しっかりシステムが構築されており、非常に便利でした。ベルギーは小国であるため大学の数は少ないのですが、だからこそ優秀でアグレッシブな研究者がさまざまな国から一つの大学に集まれるのだと思いました。

研究はアグレッシブですが、自分たちの時間は大切にしている印象を受けました。5時になったらそそくさと帰り始めます。ヴァカンスを大切にしますし、誕生日になればパーティーを開いて皆を家に招待し、夜はクラブで踊ったりします。私はボスドクでしたが、院生の誕生日パーティーに招いてもらったのは、緊張しつつもとても幸せでした。

日本に帰ってきた今も、やはり研究のためだけに海外に行く必要はそこまでないのかなと感じています。ただ、ベルギーで過ごした2年間でさまざまな文化や考えに触れ、それは私の考え方に多大な影



Profile — 守谷 順

2010年、東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程修了。学術博士。広島大学で日本学術振興会特別研究員、立教大学現代心理学部助教を経て、2014年より現職。専門は臨床心理学、認知心理学、パーソナリティ心理学、感情心理学。著書は『認知心理学ハンドブック』（分担執筆、有斐閣）など。

響を及ぼしたと思います。このかけがえのない時間は、何物にも変えられない大切なものだと感じています。

ここまで一息に書いてから数ヶ月が経ち、その間ベルギーからお客様を迎える機会があり、久しぶりに英語を話すことになりました。英会話は相変わらずうまくないわけですが、ベルギー生活以前に比べ、海外の人を特別視せず、話すことにあまり抵抗がなくなったのは、少し成長できたのかなと思います。

何かを経験すると、それが特別でないことに気づきます。それは楽しいことが一つひとつ消えていく寂しい瞬間かもしれませんが、同時に素直な目で物事を判断できるようになり、世界がまた一つ変わる瞬間なのかもしれないと思っています。

最後に、海外での研究を快諾していただいた杉浦先生、何も分らない私を快く受け入れてくれたルディ（Rudi De Raedt）先生、エルンスト（Ernst Koster）先生、PANLAB メンバーの皆さんに心より感謝いたします。